

原版と銅版画作品のアーカイブ

2022 年度活動報告

本年度は美術家・今村源氏との作品制作、美術家・林泰彦氏（パラモデル）との試作制作、及び美術家・竹村京氏との打ち合わせなどを行いました。今村氏との研究ではキノコの体験記録を収集し、それを銅版画の技法を伴って作品として氏が形にしていくという方向でした。前年度に2回生銅版画基礎を選択した学生の協力を得て制作した銅版画作品がおよそ30点以上あり、その作品を元に、これから制作をどのように進めていくかを検討していくことから本年度は始まりました。

検討していく中で、氏の考えている制作の方向性と集まった銅版画作品には大きな齟齬があることがわかってきました。集まった銅版画作品は世界の一部を切り取っただけの小さな部分のようであるのに対して、氏が求めているのはその銅版画が出来上がるまでにこぼれ落ちてしまったきっかけや出会い、状況や色や匂い、季節や場所などの情報が重要であるということでした。集まっていた銅版画を使って、美術作品として仕上げることも可能でしたが、話し合う過程でそういったまとめ方は避けようという結論になり、再度、銅版画を集めるための条件や制作方法、人選を含めて一から練り直すことになりました。

再び条件を整える上で重要視したことは、そもそもキノコに出会うということは自然現象に左右され、キノコ自体が神出鬼没であり、出会い自体が一瞬で、いつでも見れるようなものではないことで、それらを収集するにしてもある程度キノコのことを知っている、もしくは熱意のある人でないと難しいのではないかと。もう一つは、それらを元に銅版画として表現する際に、銅版画の技法自体がある程度の経験が必要なものがほとんどで、また制作する際に機材の整った工房が必要であり、キノコに熱意がある人のなかで興味と技術の両立している人を探すことが難しい点（銅版画とキノコの図柄自体は相性が良いと思われる）。

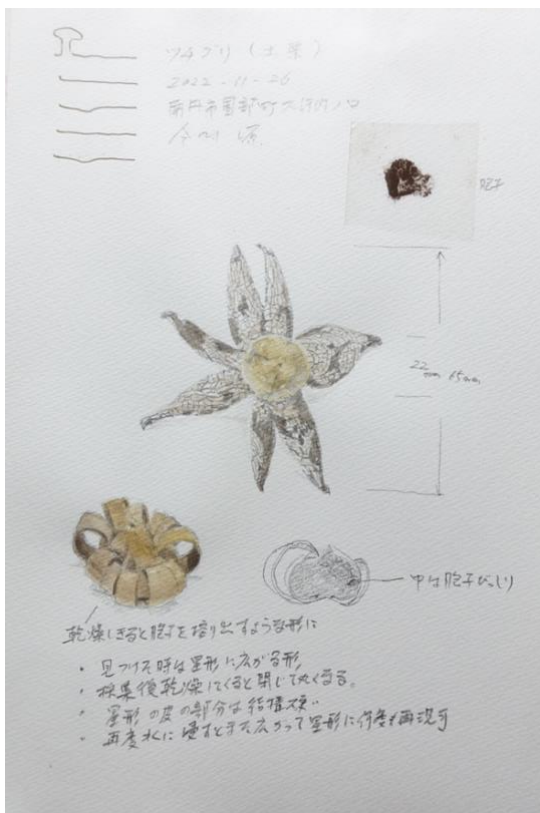
最初の問題点に関しては、氏の旧知の間柄でもある作家（美術家・キノコ研究者など）に協力してもらうこと、菌類研究会の活動に氏とともに参加した学生にも協力してもらうこととしました。また、銅版画技法に関しては、技法の中で最も直感的なドライポイントという技法を選択することにしています。ドライポイントは、鉄筆で直接銅の板に線を刻む技法であり、最古の技法であるエングレーヴィングの修正用として開発されました。初心者でも扱いやすく、鉄筆さえあれば誰でも簡単に線を引くことができ、また抑揚のある、作家の個性を反映させやすい技法です。反面、刷りに関しては自由度も高く、安定して複数枚制作することができるエッチングなどの技法と比べて、一定の技術を必要とします。またエディションも多く取れないことが特徴です。それらネガティブな部分は私と参加メンバーである銅版画経験者が下支えして刷りを行うことにしました。諸々の条件を整え、氏が特別に用意したドローイング用の紙と銅版画セットをまとめ、参加者に配布し、各々でキノコ観察からスケッチをすることになりました。作品の完成はまた先延ばしになりましたが、スケッチの様子から期待することも多く、情報を共有しながら2023年のキノコシーズンを迎えることとなります。氏の求める循環の中に銅版画が位置付けられて作品化されることは、通俗的な銅版画の表現とは異なる可能性を含んでいると考えています。

パラモデル・林泰彦氏の制作は常套的な版画制作のアイデアとは全く別のきっかけから始まりました。アイデアの元になった平面作品があり、その作品は丸いシール（5mmから30mm程度）をばら撒き、偶然できた形を重ねて作品が作られていました。その作品を元に、いくつか銅版に落とし込むためのトライアルを制作する予定にしています。実際にそのシールを防食材料として使用し、腐食技法にて定着する方法と、写真製版を使用して腐食する2パターンの制作方法を現在検討しています。平面作品として一点ものの制作を考えるのではなく、ポジフィルムや版自体を交換可能なものとして考えることで偶然がまた偶然を生むような制作を検討している段階です。

これらの研究を通して、常套的な銅版画制作の方法や理念とは違う部分を強く感じることができました。例えば下絵があり、銅版画技法を使用して制作していく方向も否定されることはありませんが、本学版画研究室で試みられている、イメージと物質の関係を他メディアと繋げるような研究や、見えている表面は物質と物質の間であるという中間領域としての版画研究など、連綿と続いている意識もありましたが、作品を唯一のものとして考えず、様々な繋がりの中の一つの位置として捉えることが可能であり、循環の中に位置付けることで新たな版画の可能性を開くことも

できるのではないかと意識させられました。版画概念の拡大が叫ばれて半世紀になりますが、ようやくその概念の先を示唆するような研究が現れ始めた、作家の制作を下支えしながら静かに確信しています。

大西伸明



集まったキノコの記録